国分寺「天池堂」について

主幹研究員　延原　隆司

１．はじめに

国分寺「天池堂」は、岡山県津山市の国分寺境内にこのたび新築された資料展示館兼休憩所である。

当協会に事業主である国分寺住職より、設計・監理の依頼があり平成25年４月に設計に着手し、平成27年10月に業務を完了した。本稿でその経過等を紹介する。

２．国分寺

国分寺の境内は、国指定史跡「美作国分寺跡」に境内の約半分が重なるように位置している。現在の本堂は、文政６年（1823年）津山藩主、松平公の補助を受けて再建したものである。

今回、設計を依頼された敷地は国分寺の南西隅にある人工の堀に囲まれた約６ｍ四方の狭小地であった。史跡地に係る範囲の地盤は盛土されたもので、建設地も盛土地盤で周囲を掘り下げて石積擁壁を造り、堀には裏山からの地下水を流し込んで境内の外へ排水する構造としていた。

３．設計

設計に関する条件は、発掘調査等で出土した「美作国分寺」の瓦等を展示する資料館的な建物で、且つ、檀信徒の憩いの場となる様な建物を設計して欲しいということと、国分寺境内に相応しい本格的なものを建てて欲しいという２点であった。

設計打合せの結果、普段は資料展示を主として行い、桜や紅葉の季節にはお茶の接待やお茶会等にも使用出来るようにし、境内の雰囲気に調和するような外観とすることとなった。結果、６畳間大の待合風の建物と堀を渡る太鼓橋風渡り廊下を計画した。

４．許認可

建設地は国指定史跡に指定されており、文化庁の現状変更の許可が必要であった。平成12年の発掘調査により国分寺境内の南東隅に「美作国分寺」の五重塔の雨落側溝の石積遺構が確認されており、今回の建設予定地と３ｍほどの距離であった。建築に先立ち新たに実施した発掘調査の結果を踏まえて、基礎構築のための掘削深度を極力浅くするなど遺構

保護に細心の注意を払った設計を行い、その許可を得た。

5．工事

平成26年10月に着手し、生コン業者と設備業者以外はとび工、大工、左官工、屋根工、木材納入業者（一部、奈良県の業者を含む）、建具工、石工など全て京都の職人・業者で施工に当った。各業者とも筆者とは何度も仕事を一緒にしたことがあり、安心して任せられたことは非常にありがたかった。

住職により「天池堂」と名付けられた建物は、11月に檀信徒にお披露目された。

6．構造形式

天池堂

木造、平屋建、寄席棟造

建築面積：12.54㎡

棟　　高：設計ＧＬ＋3.65m

屋　　根：銅板葺・棟瓦積・軒付柿積

外　　壁：聚楽塗・板張り

渡り廊下

木造、平屋建、切棟造

建築面積：4.26㎡

棟　　高：設計ＧＬ＋3.06m

屋　　根：銅板葺・棟瓦積・軒付柿積

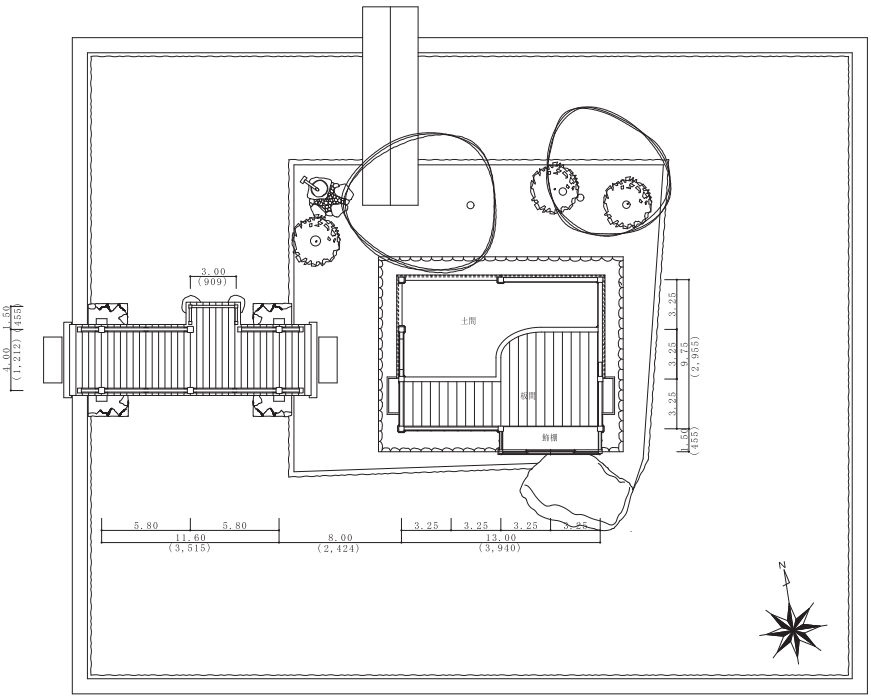

図１　平面図

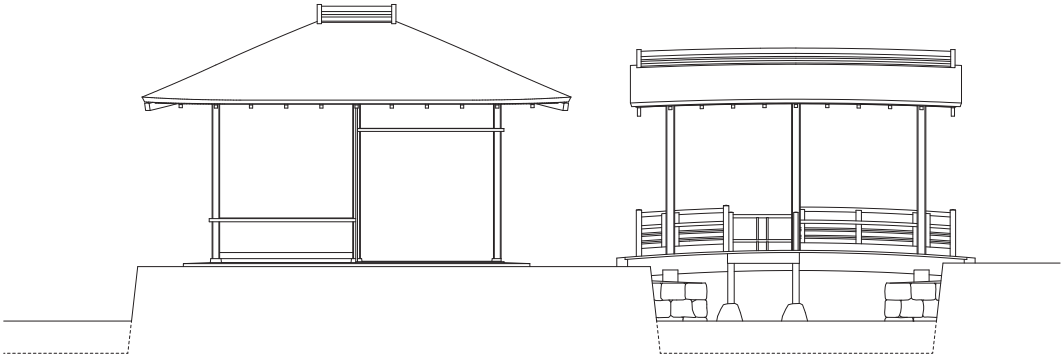

図２　天池堂・渡り廊下　北立面

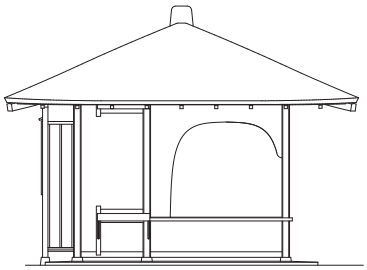

図３　天池堂　東立面

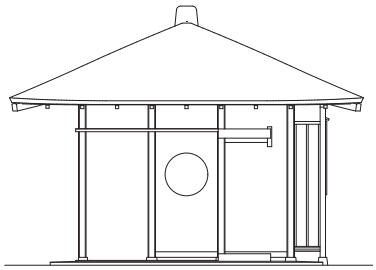

図４　天池堂　西立面

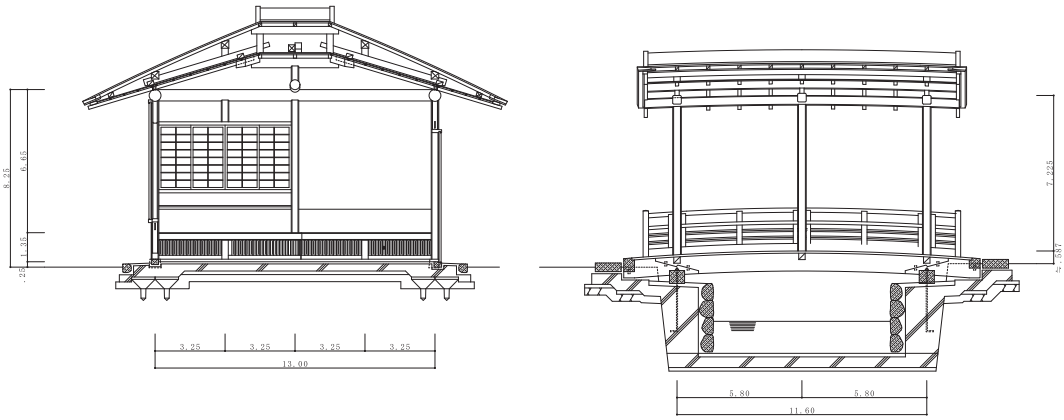

図５　天池堂・渡り廊下　桁行断面

図６　天池堂（東より見る）

図７　天池堂・渡り廊下（南西より見る）

図８　天池堂内部（北西より見る）

図９　天池堂内部（見上げ）

図10　天池堂内部（北東より見る）

図11　渡り廊下（北より見る）